

名家の紋章や名酒のラベルに残る遠きイノシシの栄光

「ネ」「ウシ」「トラ」で始まる、ご存じ十二支。その最後は「イヌ」「イ」と、「イノシシ」で終わっている。

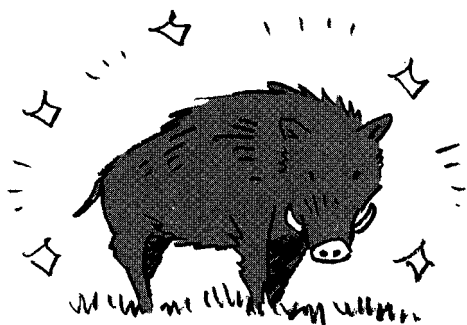
十二支の最後がなぜイノシシなのか、学者諸先生のお書きになった十二支物語などを見ても、この順序がどうして決まったかについてはなぜか不明なのである。

が、十二支の意味するところについては、それぞれの動物がそのものズバリを指すというよりも、むしろ季節や天体の運行と関係づけて考えられているとかで、たとえば十二支のトップをうけたまわる「ネ」（子）は、子は「滋」に通じ、この季節に万物の芽生えが見られることを表している。

同様に、十二支のラストをつとめる「イ」（亥）については、亥は「核」に通じ、万物が次の代の種タネになることを表しているとか。

つまり「一粒の麦、もし死なずば」と共通する思想を語っているわけで、言われてみれば、イノシシやその子孫の豚が多産なのは、万物が後々までも栄えることとうつつけのサンプルといえるかもしれない。

というわけで、目を東洋から西洋に転じると、たとえばイギリスの伝統的なごちそう



といえ、実は七面鳥ではなくて長いことイノシシだった。クリスマス之夜、家族一同がテーブルのまわりに揃ったところで、召し使いがうやうやしくイノシシの頭をお盆に載せて入ってくる。キバも目も生きていたときそのままのやつで、ついで胴体が運ばれ、主人みずからそれを切り分けてめいめいの皿に盛り分ける——というのが長い間のしきたりだった。

事実、イノシシが勇猛や美味の象徴としてありがたがられていた証拠に、イギリス中のいたるところの旅籠はたごでは、十八、九世紀ごろまでは看板にイノシシの頭の絵を描いて掲げていたところが多かったといわれる。シェークスピアの時代のずっと以前から、旅館名そのものにも「イノシシの頭」を名乗るものが少なくなかったともいう。

また、日本の紋章ではとお目にかからないが、ヨーロッパの貴族のなかには、イノシシの紋章を持つ名家が少なくない。英国ジンの名酒「ゴードン・ジン」のラベルもこれまたイノシシである。